

第17回新日鉄音楽賞 贈呈式・受賞記念コンサート

——満席の聴衆から受賞者に盛大な拍手

9月4日、(財)新日鉄文化財団 紀尾井ホール(東京・千代田区)で、「第17回新日鉄音楽賞」の贈呈式と受賞記念コンサートが行われた。800席の大ホールが満席となる盛況ぶりで、聴衆は受賞者に盛大な拍手を送った。



紀尾井シンフォニエッタ東京を指揮する下野氏



ピアノ調律師について語る村上氏



お客様をお迎えする三村理事長

長年にわたり取り組む新日鉄の音楽メセナ

新日鉄は創立以来一貫して、音楽分野に対する支援を推進してきた。1955年から始まった「フジセイテツコンサート」(後の「新日鉄コンサート」)、1990年新日鉄創立20周年を機に音楽活動の拠点として設立された「紀尾井ホール」、1995年紀尾井ホールの開館と同時にレジデントオーケストラとして誕生した「紀尾井シンフォニエッタ東京」、紀尾井ホールの運営母体として音楽家の育成や優れた音楽活動に対する支援を行ってきた「(財)新日鉄文化財団」など、音楽メセナ活動を重要な社会貢献活動の柱として推進してきた。

17回目を迎えた新日鉄音楽賞

新日鉄音楽賞は、1990年に新日鉄創立20周年と新日鉄提供のラジオ番組「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して設立された。同賞は、日本の音楽文化の発展と将来を期待される演奏家の一層の活躍を支援することを目的として、2つの賞を設けている。一つは、将来を期待される、優れたアーティストを対象とした「フレッシュアーティスト賞」。過去には、ヴァイオリニストの諏訪内晶子氏など今や日本を代表する演奏家に贈呈されている。もう一つは、演奏家に限らず音楽文化の発展に大

きな貢献を果たした個人を対象とした「特別賞」。第17回目は、フレッシュアーティスト賞を指揮者の下野竜也氏、特別賞をピアノ調律師の村上輝久氏が受賞した。

9月4日の贈呈式では、お招きしたお客様で満席となった大ホールで(財)新日鉄文化財団理事長の三村明夫が「本音楽賞を創設以来、輩出した多くのアーティストが期待通り活躍していることを大変うれしく思います。開館12年目となる紀尾井ホールでは、これまでの成果をふまえ、親しみやすく質の高い音楽を提供するため新シリーズを立ち上げるなど、さらに進化し、日本の音楽文化に貢献します」と挨拶し、受賞者に表彰状とトロフィー、賞金を贈った。

受賞記念コンサートに先立ち、村上氏がピアノ調律師の仕事や往年の名ピアニストであるミケランジェリとリヒテルの専属調律師として活躍したエピソードなどを披露。聴衆は、巨匠たちの信頼を受け名演奏を裏で支えた村上氏の話に興味深げに聞き入っていた。続いて受賞記念コンサートでは、紀尾井シンフォニエッタ東京を下野氏が指揮し、モーツァルトのセレナード第13番 ト長調 K.525『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』、チャイコフスキーの弦楽セレナード ハ長調 op.48が演奏された。渾身の指揮による演奏に、聴衆は盛大な拍手を送った。

受賞理由

指揮者 下野 竜也氏

自分がどんな音楽をやりたいかを徹底するのに労を惜しまない。技術の冴えや見映えよりも、いい音楽をやる心を大切に。オーケストラのメンバーから「やる気を起こさせる指揮者」との声が出るのも、そのフレッシュな心が通じるからであろう。意欲と活力に不足のない若手指揮者の今後の一層の充実を期待する。

「38歳でフレッシュとはいえない年齢ですが、30歳であるコンクールに合格したとき朝比奈隆先生から『あと60年』と言われたことを思い出します。指揮者は演奏家、作曲家の存在なしには成立しない、一人では何もできない“不思議な”音楽家です。また、音楽だけではなく音楽界全体のことを考えるものだとされたことがあります。もう一度原点に立ち戻り、いい音楽家、いい人間になれるよう努力していきます」



ピアノ調律師 村上輝久氏

ミケランジェリやリヒテルの専属調律師として世界26カ国をまわり、ドイツの新聞に“東洋の魔術師”と報じられたその技能もさることながら、ヤマハのピアノ製造部長、ピアノテクニカルアカデミー初代所長として後進を育成、またヤマハピアノを世界のトップ楽器に引き上げる礎を築いたその実績を高く評価した。

「『いい音ってなんだろう?』とは子ども向けの講義の題として思いつき、気に入って本のタイトルにもしていますが、58年経ってもまだわからない奥の深い問いですね。いい音の基本はあってもその場で求められるものは違い、ホールに合わせて作り上げていくものだと思います。今回の受賞はまだ引退するなという意味だと思って健康が続く限り、調律師として、そして後進の指導に尽力していきます」